



「村の成り立ち」

貞治3年（1364）猿投神社の猿投半行社勸進帳に苜生郷という地名が記されている。本殿改修費用をどこから集めたかを記載した文書で苜生村人が四百五十文を献上したと記している。この頃、すでに村の形があったと思われる。

戦後、この地で古代中世時代の猿投窯が発見され、苜生でも数多くの窯跡が見つかった。古代に焼き物が栄えたということで奈良平安時代から人々が暮らしていたと推測される。江戸時代の初期にはすでに北苜生村（本郷）と南苜生村に分かれていた。集落は苜生本郷、南苜生、少し遅れて苜生新田の順に形成され、明治14年（1881）に苜生村となった。

①苜生神社

創立年代は不詳であるが、貞治年間、塚本源太夫信盛が子政喜に遺命して、南苜生村に氏神として正八幡宮を建立した。明治42年（1909）八幡社、愛宕神社等をあわせて苜生神社と改称した。拝殿は宮大工（小野田又蔵）の建立である。



苜生神社拝殿

祭り神が多いのが特長で天照大御神等34柱ほどある。現在、お祭りでは巫女舞、棒の手が奉納されているが、戦前は村芝居（歌舞伎）角力（相撲）献馬等が華やかに行われていた。

②村芝居（歌舞伎）



村芝居奉納額

村芝居は幕末から戦後にかけて祭礼などの余興として地域の人々による芝居が行われていて、特に蒺生は盛んであった。明治31年（1898）11月1日に行われた村芝居の上演演目と配役を記した額が奉納された。

現在はみよし市立歴史民俗資料館に委託保管されている。

③禮善寺

浄土真宗大谷派。創立年代は不詳。

寛文11年（1671）祐閑を中興開山とし、明治10年（1877）に住職源浄の死去に伴い子の源晃が沢田某に譲り渡したとされる。その後、明治26年（1893）9月尾張国海東郡神島田村唐臼（現津島市）にある安託寺あんたくじの慈顕は、長男に寺を譲り当寺に入ったという。



禮善寺本堂



無量寺本堂

④無量寺

曹洞宗。創建については、尾張国横根城主伊豆原六郎左衛門重房が、桶狭間の合戦に巻き込まれ、戦死した家来の菩提を弔うために十一面観音を奉請し、南溟山無量寺なんめいざんと号したことに始まる。以前は蒺生神社の鳥居前にあったが元禄11年（1698）現在の地に移り高山無量寺と改めた。

⑤本郷の常夜灯



本郷常夜灯

文化4年(1807)「^{ていぼう}丁卯年十一年村中安全」と刻んである。以前は集落の南、県道米野木菟生線を少し入った所にあったが、区画整理の折に禮善寺前の道路を挟んだ斜め向かいに移動した。

菟生神社の方に向けて建っている。

⑥不動明王

不動明王は修驗宗旧理しゆげん法院の本尊で、創建は修驗宗全盛の南北朝時代とされる。

明治6年(1873)廢院となり、小堂に安置された。石像の不動明王の他に弘法大師、波切不動が祀られている。



不動明王

⑦岩蔵寺

曹洞宗で元和5年(1619)年創建。現在の本堂は昭和52年(1977)に再建されたもので、寺内には三十三観音、地藏菩薩座像が安置され、弘法堂も境内にある。



岩蔵寺本堂

⑧南菟生の常夜灯と八幡神社



南菟生常夜灯と八幡神社

常夜灯には、文化8年（1811）と刻んであり、八幡神社の前に建っている。以前は菟生バス停のあたりに立っていた。南菟生の八幡神社は明治42年（1909）に菟生神社に合祀されたが、南菟生に災難が続いたため、元の地の南山に戻した。

⑨薬王寺

曹洞宗。寛政5年（1793）三河国宝林寺の梅橋の隠居所として発足したという。

明治15年（1882）以来、無量寺説教所とも称したが、大戦後、曹洞宗薬王寺となった。当時から「庵主さん」と呼ばれ通称とし、尼僧が嫁入り前の女性に教育する所でもあった。



薬王寺



愛宕神社

⑩^{あたご}愛宕神社

菟生新田の守り神で、祭り神は火の神「カグツチノミコト」である。明治6年（1873）に菟生神社に合祀されたが、その後新田の切で災害が多く発生した為、昭和30年（1955）新田の切に戻された。菟生の氏神は菟生神社だが二重氏子となっている。

■ は寺社



福谷の成立

福谷で人が生活をしていたという証は、^{さなげよう}猿投窯の発掘調査により、8世紀頃と思われる。当時全国最大規模の陶器生産拠点であったので、多くの陶工が従事し、生活していた。浮谷（福谷）の地名が最初に出てくるのは、猿投神社の勧進に^{じょうじ}貞治3年（1364）とある。歴史上、福谷（浮谷）の地名が多く記載されるのは「福谷城の戦い（弘治2年（1556）又は永禄2年（1559）の2説がある）」からである。

①福谷寺

浄土真宗大谷派。以前の寺は、福谷城の下、集落の旧街道の横にあったが、令和2年（2020）から現在地に移転した。寺の創立は、^{しんらんしょうにん}親鸞聖人御絵像の裏書きから、元亀2年（1571）のころである。福谷城の戦い後に、亡くなった武士を弔うため、念仏の庵として建立されたと推測される。



福谷寺本堂

② 帰西寺

浄土宗。門をくぐると、寄棟造りの本堂が石灯籠を前にして建っている。寺の沿革は、延宝5年（1677）3月（西加茂郡誌）とある。開山上人は、暁蓮社順誉清元和尚と位牌に記され、歴代住職の位牌に浄土宗の蓮社号と誉号が記載されている。



帰西寺本堂

③ 又助地藏



又助地藏

帰西寺の境内に、3体のお地藏さんが祀られている。このうちの一体が「又助地藏さん」と呼ばれ親しまれている。むかし、仲田橋付近にもう1体のお地藏さんと並んで祀られていた。河川改修のとき大水で流されて行方がわからなかった。その後、川底に沈んでいるのが見つかり、旧公民館横に辻地藏と馬頭観音と一緒に祀られた。区民会館の建て替にもない帰西寺境内に移設された。

④ 常夜灯

上之切と寺ノ前にあり、みよし市でも古い常夜灯である。最近まで、秋葉講の人が当番で、每晚拜んでロウソクに火を灯して^{とも}いた。安永9年（1780）と天明3年（1783）に建立された。



上之切の常夜灯

⑤福谷八柱社



福谷八柱社

福谷集落の発祥地と考えられる薬師洞に、八柱社がある。創建年代ははっきりしないが、社殿の隣に由緒ある薬師堂、南に実相院（オシャクチ）さんがあったことから、福谷最古の勧請かんじょうと考えられる。現在の八柱社は、昭和47年（1972）に本殿をはじめ諸殿の造営を行った。境内の南側に約10mの龍の石組がある。神社の地下にある龍脈（水脈）がパワースポットになっているので、その象徴として作庭されたかもしれない。

⑥薬師堂

薬師如来様の例祭は、旧暦の10月、「八日薬師」と「十二薬師」を開催し、講の輪番で経をあげて接待を行う。また12年ごとの寅年には、盛大に御開帳を行う。室町時代後期に、福谷城主糟谷源左エ門は仏堂を寄進した。その後元禄時代に、伊保城主本多弾正少弼は、眼病を治してほしいと祈願したところ治ったため、厨子ずしを寄進した。昭和51年（1976）12月26日に、お堂の新築竣工開扉かいひの大祭を行った。眼病にご利益があるお薬師様としての参詣者が多い。



⑦福谷城址

福谷城跡は、遺構が多く残っている歴史的価値の高い城跡である。市は、昭和59年（1984）から地形測量・文献調査を行っている。

福谷城跡は、境川とその支流小石川に挟まれた舌状の丘陵地の先端に位置し、

主部とその周囲に複数の曲輪、櫓、堀、土塁などを配した平山城である。築城年代ははっきりしないが、戦国時代に三河と尾張との国境の城として攻防の舞台となった。戦国時代における「福谷城の戦い」は『家忠日記増補追加』、『東照軍鑑』などに記録があり、弘治・永禄年間に守備する今川方の酒井忠次らと、攻撃する織田方の柴田勝家との間に激しい攻防があり、今川方が防戦したことを伝えている。



1560年頃の予想復元図

⑧市場古墳



出土品

て小規模のものと考えられている。

市場古墳は昭和37年（1962）5月、鈴木氏が所有する福谷城址南端の山（土塁跡）を崩して稲荷社の造営をした際、古松の根本から土器類を発見した。出土品はこれのみであった。掘り起した土中に数片の土師器の破片を採集した。古墳の様式は、石組の中に埋められていて詳細は不明である。極め

⑨一問道路

福谷で唯一現存する江戸時代からのさと道である。他の場所は、拡幅されたり、付け替えられたりして、この1カ所だけ現存する。



黒笹

■は寺社



①黒笹八幡神社



鳥居



秋季例大祭(棒の手奉納)

黒笹村は、江戸時代初期に福谷村の出郷から独立した。元禄8年(1695)の棟札が残る。御祭神は^{ほんだわけのみこと}誉田別尊である。秋季例大祭には、三好棒の手保存会により棒の手が奉納される。

②法春寺

浄土真宗大谷派。

〈主な行事〉

^{ひがんえ}彼岸会(春、秋)

報恩講・女人報恩講(12月)

南から山門、本堂を望む



かんのんじ
③ 観音寺

曹洞宗。古くは観音堂と称して、住職は尼僧が多かった。

〈主な行事〉

大般若 (1月)

大施餓鬼会 (8月)



観音寺本堂

もんじょ
④ 黒笹村文書

黒笹村には江戸時代から昭和時代までの公文書が保管されていた。昭和20年(1945)までの文書は、みよし市立歴史民俗資料館にあずけられ、閲覧することができる。

黒笹村文書内訳

分類	内容	点数	分類	内容	点数
A	法令・制定・治安	309	K	租税	146
B	凶災・救恤	36	L	水利・土木・普請	178
C	村政・村財政	594	M	農業・諸産業	99
D	戸口・戸数	259	N	その他	65
E	売買・金銭貸借	149	O	民俗・芸能	13
F	無尽・金融一般	58	P	教育・教養	48
G	家	15	Q	絵図・地図	113
H	寺社・宗教一般	83	R	軍事	22
I	土地・開発・林野	617	S	議会・選挙	29
J	年賀・免定・割付	763		合計	3,596

(「黒笹区誌」より)

むらかがみ
私領村鑑



享保13年(1728)当時は、御料(幕府領)と私領(巨勢氏)の相給(一つの村に複数の領主が存在すること)であった。

この村鑑は、巨勢大和守の代官に差出された当時の村制一覧である。

江戸時代中期の村絵図

黒笹村の村役人から出された村絵図には、二家相給の領主に属する農民が色分けされている。私領の農民は黄色、御料（幕府領）の農民は赤色で示されている。

享保3年（1718）当時

- ・御料（幕府領）
- ・巨勢丹波守（旗本領）



江戸時代中期の村絵図

⑤明治後期の黒笹付近



明治時代の村絵図

黒笹村は江戸時代には交通の便は良くなかった。明治時代になって飯田街道の拠点伊保につながる伊保道が整備されたり、三好村とのつながりが強くなったりして交通の便が良くなった。

他郷とのつながり

三好村の呉服屋がお得意先の家を廻るのに便利な地図を作り保存されていた。その図には個々の家だけでなく目印の辻地蔵も記されていた。

⑥辻地蔵

黒笹から伊保への道しるべとなつたお地蔵さん。



昔の辻（現在の^{ひろくて}広久伝公園の南東にある）

⑦名鉄豊田線開通、黒笹駅開業－昭和54年（1979）

黒笹地区は、名鉄豊田新線（当時の名称）によって大きく変わった。それま



でのへんびな黒笹から交通の便利な住宅地になったのである。地域開発の原動力となったのが、鉄道の開通である。三好町と地元住民から成る三好ヶ丘第三特定土地区画整理組合の協力によって宅地造成が進み、住宅地としての発展が始まった。

⑧黒笹公園と三好ヶ丘配水場

黒笹の高台に設置された配水場は、おかよし地区住宅地一帯の配水場として建設された。（平成5年〈1993〉3月）。

町と黒笹区は緑地保全と市民公園として黒笹公園を開設して使用を始めた（平成15年〈2003〉3月31日）。



黒笹公園と三好ヶ丘配水場